

# 仏心と葬弁儀

―その5―

## 人それぞれな、愛の形

こと仏教に限らず、すべての宗教の根源には「他者に対する愛」があると思います。しかし、言い尽くされたテーマではありませんが、そんな「愛の実体」をとらえ切るのは、容易なことではありません。わたしたちは歌や音楽、映画などで毎日のように「愛」に接してはいますが、果たして「愛」の何たるかが分かっているでしょうか。

中でも特に「夫婦愛」は難しいものの一つだと思われれます。昔から釧路は離婚率の高い街だとささやかれていましたが、釧路に限らず、確かにわたしたちの身边にはいつでも「夫婦の愛の挫折」が転がっているとと言えるかもしれません。

そんな夫婦愛を高めるもののひとつが、悲しみや苦しみを伴う「試練」なのかもしれません。この試練は、思いもかけないさまざまな形をもって襲ってくるため、さらにわたしたちはその対応に苦しむのです。

## 飛田を襲った「悲しみの試練」

丸和堂の代表取締役社長である飛田英雄・芳栄（よしえ）夫妻が結婚したのは、まだ飛田が当時の太平洋炭鉱に勤めていた昭和三十八年十一月。飛田二十二歳、芳栄が二十一歳

の時のことでした。飛田はこの時、すでに一戸建てのマイホームを建てており、自分の母親と新妻を新居に迎えて、つましくも幸せな生活を始め、やがて昭和四十年には念願の長男、秀巳の誕生を迎えました。

そんな平和な毎日を送っていた昭和四十二年八月、飛田の母親が突然亡くなってしまいました。四男として母親の葬儀一切を取り仕切り、普段どおりの日常にようやく戻ったとおもった矢先の翌四十三年二月、なんと今度は最愛のわが子・秀巳が、ふと目を離したすきに頭から熱湯をかぶってしまった、全身に大やけどを負ってしまったのです。

飛田夫妻は半狂乱となり、着の身着のまま秀巳を抱きかかえて列車に飛び乗り、そのまま札幌の大きな病院へと向かいました。列車の中では、痛みにあえぐ秀巳を励まし、絶えず水を口に含ませながら、外気を患部に触れさせないように全身を布でくるんで、しっかりと抱きかかえていました。そのまま一睡もせず札幌へ到着し、大学病院へと運び込みましたが時すでに遅く、懸命な手当の甲斐もなく秀巳は天国へと旅立ってしまったのでした。

「つづく」

■次回の掲載は一月二十四日(土)を予定しております。